

## 第3回不登校・不登校傾向対策委員会

2月13日（火）に今年度最後となる不登校・不登校傾向対策委員会を開催いたしました。

今回、講師として来てくださったのは高知県教育委員会事務局 人権教育・児童生徒課 児童生徒支援担当チーフの宮田 一仁 様です。以下の5点について委員の皆さんも自分事として考える時間もいただきながら、ご講演いただきました。

### 皆さんと考えたいこと

①子どもにとって不登校になることは不利益？

皆さんの自己決定を大事にしたいです



②子どもはなぜ、学校に行くの？

③不登校の状況にある子どものために教員ができる支援で一番大切なことは何？

④「もう少し待ちましょう」ってどういうこと？

⑤不登校支援を学校全体で進めるために必要なことって？

Challenge by choice!



2

### 宮田先生の資料より抜粋

不登校は環境によっては、どの児童生徒にも起こり得るものとして捉え、支援に際しては登校させることにこだわるのではなく、児童生徒自らが進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があるというお話がありました。

また、欠席が続き始めるとほとんどの先生方が家庭訪問をされると思いますが、何のための家庭訪問なのかをきちんと理解していることが大切だとおっしゃっていました。基本的には、その児童生徒の状況・気持ちを受け止め、「気にかけているよ」というサインを適切に送ることが大切です。特に、不登校の原因を問い詰めたり、おやみに登校刺激をしたり、自身の価値観を押し付けるような言動（「今ならまだ勉強も追いつけるよ」など）は逆効果だということを、ご自身の失敗談を交えてお話いただき、私自身は重なる部分もあり反省しました。

今回のお話の要点をまとめると、以下のようになると思います。

- ・不登校は誰にでも起こりうる→児童生徒・保護者の気持ちに寄り添う姿勢が大切。

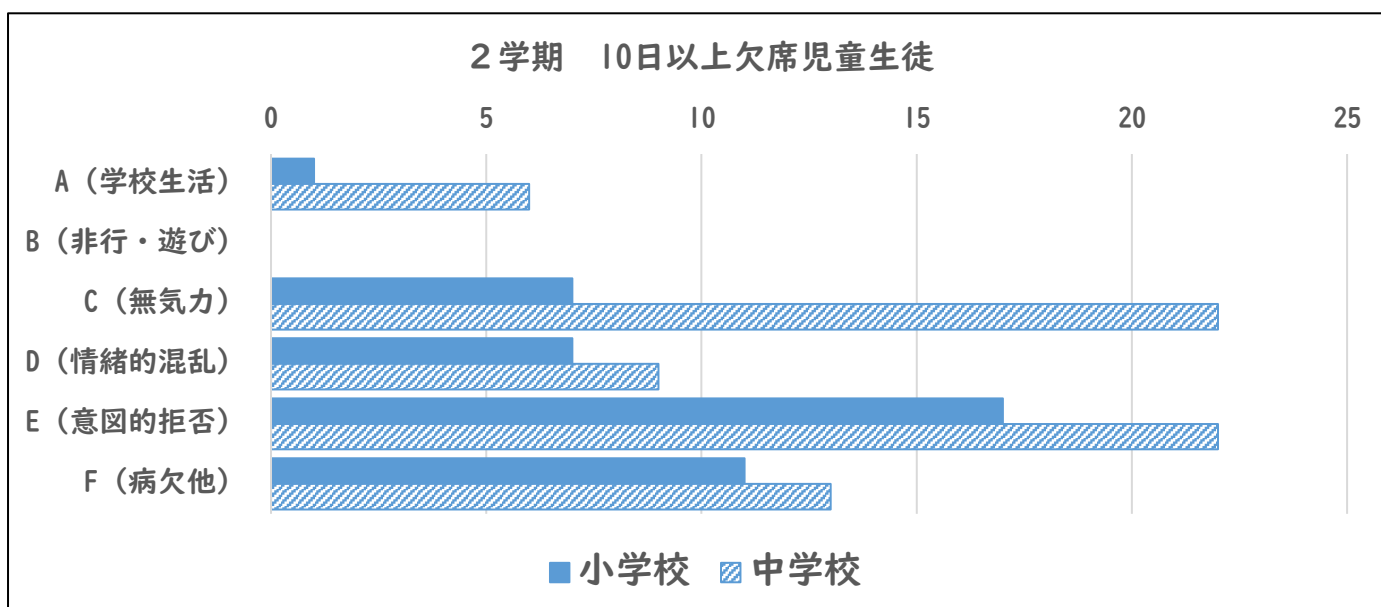


- ・不登校に至るまでに本人が感じていた「負荷」は複雑。たまたま最後に乗かった「負荷」に焦点を当てがちだが、広くとらえて軽減できるところから対応する必要がある。まずはその「負荷」を認めて寄り添うことから。
- ・児童生徒にとって「学校から外れる」＝「社会を失う」ということ。休んでも忘れたり見捨てたりしないというサインを伝えなければいけない。そのための手段の1つとして家庭訪問や電話連絡がある。学級の仲間と繋ぐことも大切。
- ・学校組織として不登校に対する考えを明らかにし、学校全体で支援方針をもって対応する。



詳細につきましては、各校の不登校・不登校傾向対策委員にご確認いただければと思います。

さて、教育研究所では、毎学期10日以上欠席した児童生徒の様子を各校から提出してもらっています。児童生徒の変化に敏感になることで、不登校の前兆にいち早く気づき、未然防止に繋がられるようにしています。



文部科学省の定義では「不登校」とは以下のような状態ですが、「D情緒的混乱型」の欠席者の不定愁訴と「F病欠他」の欠席者の体調不良とを明確に区別することは難しい場合もあるということから、調査には「F病欠他」も含めています。

#### 不登校とは

1年間に連続又は断続して30日以上欠席した児童生徒のうち、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的理由によるものを除く）をいう。

この調査によると、「B非行・遊び型」の児童生徒はいない、ということにはなっていますが体調不良で欠席していたり、大人からは無気力と見られたりする児童生徒の中には、夜遅くまでゲームをしている・長時間スマートフォンを操作していることによって体調が優れない、という人もいるのではないのでしょうか。もちろん、欠席をする理由は複雑であったり、本人もよく分かっていなかったりと、このようなグループに単純化できる場合ばかりではないと思います。しかし、欠席している理由によって、必要な大人からのアプローチは異なるはずなので、宮田先生のお話にもあったように、本人や保護者に寄り添う姿勢をもち続けることが大切なのではないかと思っています。